

文法的形態素の習得順序について

— Diary for Hildegard における検討 —

岡 本 克 人

(人文学部・仏文科)

L'Ordre de l'Acquisition des Morphèmes Grammaticaux

— 'Diary for Hildegard' —

Katsuto OKAMOTO

*If there is one, you have to say Schuh; if
there are two, you have to say Schuhe. —
Hildegard (4 ; 4) の言葉より*

I.

拙稿の目的とするところは2つある。1つは R. Brown (1973)⁽¹⁾ の文法的形態素の獲得過程の研究を紹介すること、もう1つは Brown の仮説を W. F. Leopold の 'Speech Development of a Bilingual Child' (1949) の第4巻 "Diary from Age 2 (Diary for Hildegard)"⁽²⁾ を分析することによって検討することである⁽³⁾。

II.

Brown は言語習得の初期段階に高い頻度で現われる14の文法的形態素について、Adam, Sarah, Eve と名づけた3人の子供を被験者とし、その自発的発話 (Spontaneous speech) を分析した。14の形態素は、1. 現在進行形語尾 -ing 2-3. 前置詞 *in* と *on* 4. 複数形 5. 不規則動詞の過去形 6. 所有格 -s 7. 非収縮性の連辞 *be* 8. 冠詞 *the* と *a* 9. 規則動詞の過去形 10. 規則動詞の3人称語尾 -s 11. 3人称の不規則形 (*does*, *has* をさす) 12. 非収縮性助動詞 (進行形の *be* のみ) 13. 収縮性の連辞 (*I'm* の 'm 等をさす) 14. 収縮性助動詞 (すなわち12.の縮約形である *be* のみ)、以上で、Brown はこれらの文法的形態素が3人の子供において同じような順序で習得されたと主張する。

問題は、これらの形態素がいつ習得されたとみなすのか、ということである。一般的に幼児の言語において形態素は初め不確かな形で (発音があいまいである等) 現われ、散発的である。しだいに使用頻度は増すが、正しくいつも使用されるわけではない。又、誤った使用は、かなり長期にわたって続き、個人差もあるが、就学時になってもまだ誤りが続くことも多い⁽⁴⁾。

したがって習得時期の決定は恣意的なものにならざるを得ないが、Brown は次の方法によって習得時点を求めた。

Figure 12.におけるグラフ上の点は、各 sample において義務的文脈 (obligatory context) でどれ位の比率で形態素が現われたかを示す。「義務的」とは言語的、言語外的状況から判断してその形態素が現われるべきであることをさしている⁽⁵⁾ (附記1)。各 sample は定期的に録音 (Adam,

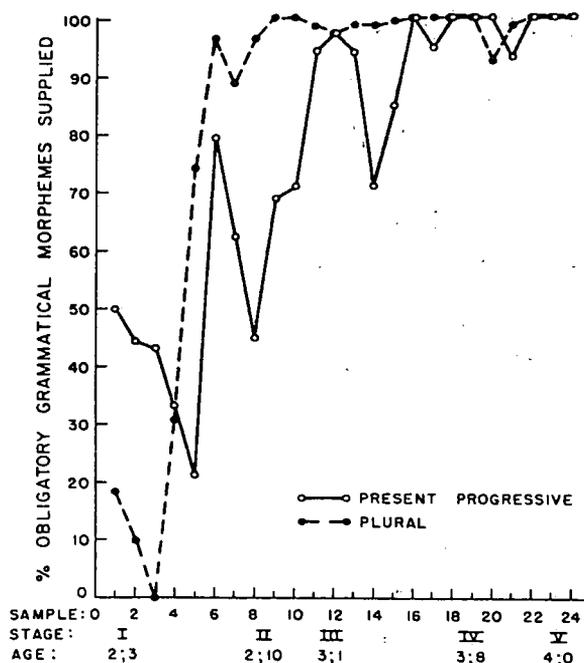


Figure 12. The development of progressive and plural inflections in Sarah (Brown による)

Eve は隔週 2 時間, Sarah は毎週 30 分⁽⁹⁾ されたのち転記もされ, 検討に付されるのであるが, 全体的な状況からみて文法的形態素が正しくみだされているときと, そうでないときの比率が計算される。Figure 12. は Sarah の現在進行形と複数形の習得過程を示しているが, 一つの顕著な特徴がある。最初には子供がその形態素をあまり使用しない⁽⁷⁾ ので, sample の規模自体が小さい (現在進行形について, Sample 1 においてはわずか 4 つ, Sample 2 においては 11) のと, 子供の文法的知識が不完全なために⁽⁸⁾, ひどい凹凸があるが, どちらの形態素も 90% を越えたあとは比較的安定し, 大体正しく使われていることが明らかである。したがって Brown は, 3 つの連続した sample で 90% を越えたときに, その文法的形態素が習得された, とみなすことに決めた⁽⁹⁾。この図から Sarah は現在進行形を第 II 期 (Stage II) の終りに, 複数形を第 I 期 (Stage I) の後半に習得していると言える。

念のためにもう一つ例を示そう。

Figure 13. は Eve の習得過程を示すものであるが, 同じ方法により, 前置詞 *on* は第 II 期の後半に, *in* はそれより少し遅れた時期に習得されていると言える。

この方法で Brown が 3 人の子供について得た結果は Figure 14. のごとくであった。

この表を見ると, 習得の時期については, かなりの差異があるが, 14 の形態素の習得順は 3 人もよく似かよっている。Brown は 3 人の平均的習得順を Table 38. のように定める。

Brown は de Villiers による 21 人の子供における同じ形態素の獲得の調査が, 上記の事実と合致するものであることを確認し⁽¹⁰⁾, 又 Menyuk, Leopold, Ervin-Miller, Brown-Fraser の幼児の言語研究の成果もこれと矛盾せず⁽¹¹⁾, 自らの主張の補強であることを見出すのである⁽¹²⁾。

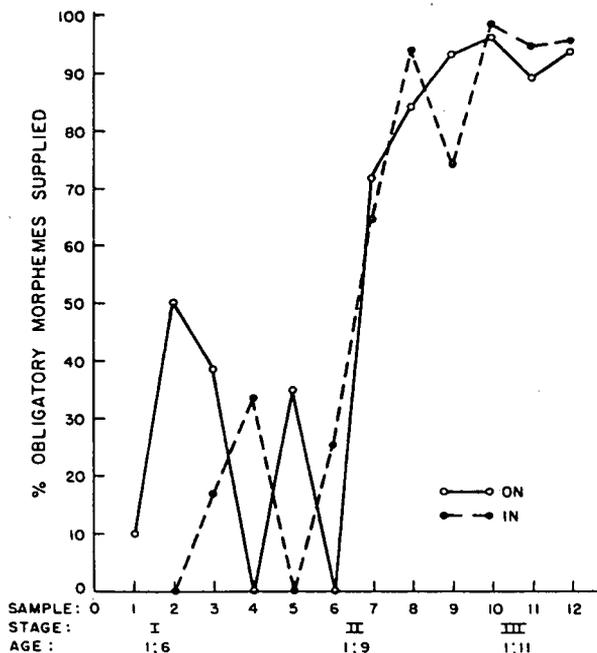


Figure 13. The prepositions *in* and *on* in Eve's first twelve samples (Brown による)

Adam	Sarah	Eve
I (2 ; 3)	I (2 ; 3)	I (1 ; 6)
II (2 ; 6) Present progressive <i>in</i> <i>on</i> , plural	II (2 ; 10) Plural <i>in</i> , <i>on</i> Present progressive, past irregular Possessive	II (1 ; 9) Present progressive, <i>on</i>
III (2 ; 11) Uncontractible copula, past irregular	III (3 ; 1) Uncontractible copula Articles	III (1 ; 11) <i>in</i>
IV (3 ; 2) Articles Third person irregular, possessive	IV (3 ; 8) Third person regular	IV (2 ; 2) Plural, possessive Past regular
V (3 ; 6) Third person regular Past regular Uncontractible auxiliary Contractible copula Contractible auxiliary	V (4 ; 0) Past regular Uncontractible auxiliary Contractible copula Third person irregular Contractible auxiliary	V (2 ; 3) Uncontractible copula Past irregular Articles Third person regular Third person irregular Uncontractible auxiliary Contractible copula Contractible auxiliary

Figure 14. The order of acquisition of 14 grammatical morphemes in three children (Brown による)

Table 38. Mean order of acquisition of 14 morphemes across three children (Brown による)

Morpheme	Average Rank
1. Present progressive	2.33
2-3. <i>in, on</i>	2.50
4. Plural	3.00
5. Past irregular	6.00
6. Possessive	6.33
7. Uncontractible copula	6.50
8. Articles	7.00
9. Past regular	9.00
10. Third person regular	9.66
11. Third person irregular	10.83
12. Uncontractible auxiliary	11.66
13. Contractible copula	12.66
14. Contractible auxiliary	14.00

III.

さてここで Brown 説の Leopold による検討に入るが、最初に Brown 自身による Leopold の参照方法をみておこう。Brown は Leopold の成果を次のようにまとめる。

Table 39. The 14 morphemes in order of acquisition for Adam, Eve, and Sarah; together with paraphrases of Leopold's comments on each morpheme for Hildegard's first two years (Brown による)

Morpheme	Comment
1. Present progressive	Two forms by 2 ; 0. Not so numerous as plural.
2-3. <i>in, on</i>	"The preposition was omitted from all adverbial phrases."
4. Plural	First one at 1 ; 10. A small number from 1 ; 11.
5. Past irregular	Only <i>forgot</i> and <i>got</i> by 2 ; 0. Latter seems synonymous with <i>have</i> .
6. Possessive	Concept expressed from 1 ; 6 as <i>N+N</i> . First <i>-s</i> at 1 ; 10. Not numerous.
7. Uncontractible copula	Dissyllabic <i>this</i> (as in <i>This's mine</i>) seems based on <i>this is</i> .
8. Articles	Not used at all in first two years.
9. Past regular	None at all through 2 ; 0.
10. Third person regular	None at all through 2 ; 0.
11. Third person irregular	None at all through 2 ; 0.
12. Uncontractible auxiliary	No auxiliary with progressives through 2 ; 0.
13. Contractible copula	Copula always missing until 2 ; 0.
14. Contractible auxiliary	No auxiliary with progressives through 2 ; 0.

Source : Based on Leopold, 1949.

(一つ誤りがあるのでここで訂正しておく。5. Past irregular の *got* が現われるのは、2 ; 1 才になってからである⁽¹³⁾。なお Present progressive に by 2 ; 0 とあるのは具体的には 1 ; 8, Past irregular は 1 ; 11 である。したがって初出時のみで整理すると、次のようになる。

- | | | |
|--------------------------|-------------------|---|
| 1. Progressive | 1 ; 8 | |
| 4. Plural | 1 ; 10 | |
| 5. Past irregular | 1 ; 11 | |
| 6. Possessive | 1 ; 10 | |
| 7. Uncontractible copula | ? ⁽¹⁴⁾ |) |

彼は Leopold については、Hildegard の 2 ; 0 才までの研究、すなわち *Speech Development of a Bilingual Child* の第 3 巻までしか参照していない。この三巻⁽¹⁵⁾は確かに綿密ですぐれた記述であるが、(第 1 巻は語彙の発達、第 2 巻は音韻の発達、第 3 巻は文法と一般的諸問題を扱っている)、残念ながら Hildegard は 2 ; 0 才までに文法面でとりたてて進歩はなかったのである。(すなわち第 4 巻が肝心の文法的形態素の発達を扱っている)
この辺の事情を Leopold は次のようにしている。

What we have found in the way of morphological devices amounts to no more than the following scanty items: a few plural endings 1 ; 11 (567); genitive (possessive) endings attached to two names 1 ; 10 (568); an experimental German infinitive ending 1 ; 8, which was soon given up (575); the ending *-ing* attached to two verbs 1 ; 8, without real learning of the present participle or gerund (573, 578); *don't* as the only auxiliary 1 ; 11, without conjugation (583).

(Vol. 3, pp. 101)

しかし、とにかく 2-3, *in*, *on* を除き、1. 4. 5. 6. 7. の形態素は 2 ; 0 才に達するまでに初めて現われ(例はきわめてわずか)他は 2 ; 0 才までに現われなかったのである。この事実はたよりなくとも Brown の説と少なくとも矛盾するものではない。したがって Brown は上の結果を自論の正当性の一つの証拠とする⁽¹⁶⁾。

しかしながら文法的形態素の初出についての記述が証拠となりうるなら、第 4 巻の *Diary for Hildegard* も検討し得るのではないか? それともこの *diary* は選択的記述であまりに主観的にすぎるだろうか。この疑問を解くべくいくつかの形態素を試みに 2 ; 0 才から順に追っていくうちに興味深い事実に気付く。記述をたどるうちに Hildegard が急にその形態素を頻繁に使用し出したことを表わす 'frequent' 等の表現が現われるのであるが、これは一つの指標にならないだろうか。それについて次に述べよう。

IV.

Figure 12. と Figure 13. すなわち計 4 個の形態素について言える一つの特徴は、非常に散発的で不安定な時期から、一挙に頻度が増す時期があることである。(Brown によると他の 10 の文法的形態素も Figure 12. と同じようなグラフを描いたという⁽¹⁷⁾。) 初めの不安定な時期を「低迷期」、あとの安定した時期を「安定期」とするとその間に「上昇期」とでもいうべき比較的短い時期がある。これは二つの Figure から判断する限りでは、期間にして 1~2 ヶ月である。低迷期は Brown も指摘するように sample の規模そのものが小さいので、たとえばグラフが一旦 50% を

をしても、それは半ばその形態素が習得されたということではない。先に述べたように、例えば Figure 12. における Sample 1 の50%はわずか4例のうちの2例がみだされたことをさすのである。したがってもっと sample を頻繁に収集すれば、低迷期はかなり低い数値にとどまるはずである。4例から推せば20~30%位であろう。上昇期の期間は sample 数を増せば場合によってもっと長くなるかもしれない。というのは Figure 12. の Present progressive は、Figure 13. の *in, on*, Figure 12. の Plural に比べ、ある程度段階的に上昇しているからである。しかし少なくとも部分的にでも急上昇する時期はあるように思われる。この図では一旦80%に達したあとは45%までしか落ちない。90%まで達したあとは70%弱までしか落ちない。

以上の事実をふまえ、一つの仮定を試みたい。Brown は定期的に (Adam, Eve については隔週2時間, Sarah は毎週30分) sample 収集をし、これを集計したわけであるが、Leopold は父親として Hildegard を四、六時中観察していたのである。又、彼女が2;0才に至るまでは詳細にわたる分析的記述を行なったのであるから Hildegard の言葉についてかなり知りつくしているわけである。(不完全な音韻上の特徴まで)。この Leopold が Hildegard に起った重大な変化を見のがすであろうか? (付録2) Leopold の記述全体を見るとある文法的事項が現れると、かなり細かい観察を行なっているのである。

したがって、Leopold が 'frequent' 及びそれに類する表現を使ったときは、一体それが何%かなどと言うことは出来ないし、言う必要もないが、Brown の90%規準 (criterion) の前後を示す、少なくともそれを反映する指標とみなしてみたい。そして低迷期の特徴と安定期の特徴の強い対比により、Leopold と Brown の誤差は極端に大きいものではないと推測する。

以下具体的検討に入るが、その前に、両者を単純に比べられないことを先に述べておかねばならない。それは調査、統計上の都合から、Brown はいつつかの違う異形態 (allomorph)⁽¹⁸⁾ をひとまとめにして統計してしまっていることである。おそらく同じ文法的形態素でもそれに属するいくつかの異形態は異なる時期に習得されるはずである。Brown は、はなはだしきは、別の機能をもつ冠詞 *the* と *a* を一括して統計している。一方 Leopold は異形態についても敏感であるが、記述の仕方はかなり鷹揚なところがある。例えば、

713 18 Dec 1932 2 ; 5

Have and *is* are usually full verbs, for instance; *Where you was?*, which amuses her mother particularly.

とあるのは、*is* が Uncontractible auxiliary *be* をいわば代表していると考えてよいであろう。したがって Leopold を調べるにあたって、すべての異形態に当たってみることは、作業上困難であるし、もし出来てもその平均値を出すことは出来ないものであるから無意味である。

よって取り得る方法として、Leopold の記述で Brown の挙げた文法的形態素に関する記述に注意し、急な使用の増大を表現する言葉 'frequent' 等に出会うと、これが単一の形態であっても Leopold のある規準に達したとみなす方法のみに依ることにして。

日誌の最初の数字は Leopold の付した参照用の番号 (一日の記録がパラグラフごといくつかの番号を付されることも多い)、次が日誌の日付け、次が Hildegard の年齢である。(ちなみに彼女の誕生日は 3 July 1930 である。) Leopold が 'frequent' あるいはそれに準じる言葉で文法的形態素について表現したときは、便宜上、すべて「Frequent になった」という表現を用いることにする。

V.

1. PRESENT PROGRESSIVE

Brown がここで言及するのは現在進行形語尾 *-ing* である。助動詞 *be* は、Brown の平均順位 12 番目になって初めて付け加えられる。Hildegard においても最初、助動詞 *be* はないまま進行形 *-ing* が現われる。Leopold の diary ではこの項目は、いきなり 666 22 Aug 1932 2; 1 に現われる。

666 22 Aug 1932 2; 1

……The “-ing” -form is frequent, although not prevailing, because she hears verbs often in this form: “Carolyn is ironing”, “I am going”, etc.⁵ A further example: /ʔa doi ba(1)baɪ, baba/, I (am) going by-by, Papa.

Note 5) The only examples from the first two years are *snowing* and *ironing*, 578.

先に設けた Leopold における規準が表現されているので、ここを習得時点とみなそう。Note 5 にもあるとおり 2; 0 才以前には *snowing* と *ironing* の 2 例のみである。

なお、2; 0 才以前の例においても、この例においても正規の発音はまだなされない。上の例において /doi/ が *going* と認められるわけはあとの記述からも分る。(なおこの時期には /g/ を /d/ と Hildegard は発音することも付け加えておかねばならない。)

683 18 Sep 1932 2; 2 に、

In the English verb ending *-ing* the consonant is still omitted: /watʃudui/, What (are) you doing?, frequent question.

とある。

この後、この項目に関し、特に取り上げる記述はない。

2-3. *in, on*

種々の前置詞のうち *in, on* は頻度が高く、Brown はこれに注目する。これらについては、先の Figure 13. でも見たように、諸形態素のうちでも上昇期が特に顕著で、その顕著さは Leopold にもそのまま現われているように見える。

in

668 22 Aug 1932 2; 1

The preposition *in* appears already fairly frequently in the form /ʔet/ (see below, 671).

679 4 Sep 1932 2; 2

/ʔet/ becomes more and more frequent as a real preposition, especially in its static function. Question: “Wo ist dein Gürtel?” Answer: /₁ʔet maɪ 'hu/, *In my room*.

とある。一応 Frequent を 668 にしておこう。

/ʔet/ という発音については 671 22 Aug 1932 2; 1 /'pʊt 'ʔet 'ho/, *put in hole(s)* 等の例がある。

on

691 2 Oct 1932 2; 2

The preposition *on* is used regularly: /ʔaɪ wət det ʔa maɪ bot/, *I want that on my Brot.*

is used regularly という表現は安定期を思わせる。Frequent はこれより少し前かもしれない。最初の記述は 664 18 Jul 1932 2; 0 にある。

(*in* と *on* の記述の差は41日である。)

4. PLURAL

いくつか前兆がある。Hildegard は 'many' という意味で *three two zwei drei* という英独語混淆の表現を用い (669 22 Aug 1932 2; 1), 又, 同じ日付で,

She knows the correct meaning of two. Upon the command "Gib Mama einen Keks" she selected two cookies and asked /tuʔ/.

とある。同じく 671 22 Aug 1932 2; 1 で /tuʃ/ *cookies*, /pek 'boɪʃ/ *peg-boards* (ここでは本当は単数でよいのだが, 「過度の一般化」が行なわれる。) 675 28 Aug 1932 2; 1 /wɪʃ/ *fishes*, /ba 'ʃ/pants を経て Frequent に達する。

686 18 Sep 1932 2; 2

For one day she used sentences like /ju dat naɪ dadi ʔäʔ/, (*Have*) *you got nein stockings on?* The /naɪ/ is an interesting use of *nein* instead of "keine", apparently because English "no" serves both functions. Otherwise she sometimes imitates the adverb *nein* playfully as /naɪ/. It does not belong to her active vocabulary.

Plurals in /-ʃ/ are now used rather regularly; but cf. *stockings* without it in the preceding paragraph.

5. PAST IRREGULAR

ここでは説明の都合上, Past regular についてもふれる。

702 13 Nov 1932 2; 4

Past-tense forms have become rather frequent. She has begun to appreciate differences in time. /mama tol mi/, *Mama told me*, contrasted with /ju tal mi/, *You tell me*, imperative. /ʔaɪ tɔ'k wɪʃ ju ; ju waf hom/, *I talked with you* (by telephone); *you was home*. She uses *you was* regularly, a spontaneous analogical simplification, parallel to the same phenomenon found in popular English. /wat hape-ntʔ/, *What happened?* /ɜɪʃ wek ap—wok ap/, (*I*) *just wake up* (correction:) *woke up*.

Leopold はここで past-tense forms という言葉を使っているが, Frequent になったのは, ここにも出ている, *told*, *was*, *woke* 等の Past irregular の方のみであろう。なぜならば, 701 6 Nov 1932 2; 4 (この702のわずか9日前) に,

Today I heard the first past tense of a full verb with regular (weak) formation: /ʔaɪ dɪst ju/, *I kissed you*.

とあり, 続けて

She has tried sporadic irregular (strong) past-tense forms for some time, for instance

bought.

とあるからである。

もっと後になると

713 18 Dec 1932 2; 5

Steady increase in strong and weak past tenses: *You pulled (/pU't/) the shade up for me?* meaning "Did you pull".

とあるが、ここで (steady increase だから少し前かもしれない), Past regular も Frequent になるのである。

6. POSSESSIVE

名詞所有格 -s については Leopold は 2; 0 才以降は注意を払わなかったらしく、これにふれた箇所は見当たらない。ただ所有代名詞についてはくわしい。668 *my, your* 2; 1 684 *yours/your* 2; 2 688 *mine* 2; 0 698 *his* 2; 3 718 *her* 2; 6 等は参考になりうるが、別の形態彙であるので取りあげない。

7. UNCONTRACTIBLE COPULA

668 22 Aug 1932 2; 1 で *why, where, what* の記述があるが (Three interrogatives have been acquired), *Where* が頻繁に Copula なしに名詞と共に用いられる。

683 18 Sep 1932 2; 2

This (is) my Papa. Is appears now rather frequently in /wat ε'J?/, What is (this)?, but more commonly /wa de't?/, What (is) that?

is が現われる。そして、

698 23 Oct 1932 2; 3

Have and be are more frequent as full verbs, not as auxiliaries.

Frequent になったのはここである。

713 18 Dec 1932 2; 5 には

Have and is are usually full verbs, for instance: Where you was?, which amuses her mother particularly.

とあり、ここでは安定期に入ってしまった感じである。

8. ARTICLES

the については次の記述が Frequent を示している。

702 13 Nov 1932 2; 4

The article *the* now appears often as /ə/ : /dati do Inə hauJ/, (*The*) *doggie goes in the house*; /ʔaI bUt maI ʔaIʃəba:n ʔanə bɔ'/, *I put my Eisenbahn on the floor* (she used the German word for "railroad", "train" merely as an isolated echo); /ʔanə tebo/, *on the table*; /datʃə we ʔaI gat maI ʔepən ʔaUt/, *That's the way I got my apron out* (out still modeled on German "ausziehen", instead of English "take off").

Brown は *the* と *a* について調べたのであるが、*a* については、はっきりとした Frequent になる時の記述がない。671 22 Aug 1932 2; 1 に *a* がまれに /ʔə/ として現われること、678 4 Sep 1932 2; 2 に *want* が /wɔtə/ (すなわちしばしば *a* が次に来るので切れ目を間違う) という形になること等、計4つの記述のみである。

9. PAST REGULAR

5. Past irregular の項にしるしたとおりである。‘steady increase’ という表現は少し強い感じもするので 2; 4→2; 5 と巾をもたせてもよいかもしれない。

10. THIRD PERSON REGULAR

703 13 Nov 1932 2; 4

The ending of the third person occurs occasionally, both /s/ and /z/ being rendered by /ʃ/ : /mama dʌmʃ hom/, *Mama comes home* ; /mama ʔitʃ ʒæt/, *Mama eats that*.

ここでは時々現われる。さらに後になると、

708 4 Dec 1932 2; 5

The ending of the third person is becoming more frequent : *belongs* /wɔŋʃ/. She also says *I says* ; she never hears this popular form, but performs the same analogy.

とある。Frequent になったのはここにおいてである。

後に Hildegard がドイツ語もかなり使うようになると、英語の文法の上にドイツ語の語彙が入ってくるのは興味深い。この形態素の安定性がうかがわれる。

770 15 April 1934 3; 9

I answered a question by “Ich glaube”. She reported to her mother : *He glaubs*.

11. THIRD PERSON IRREGULAR

これは Brown によると *does*, *has* をさすのであるが、Leopold の特別の記述はないので調べられなかった。

12. UNCONTRACTIBLE AUXILIARY

713 18 Dec 1932 2; 5

The copula *is* is frequent : *Wauwau is coming now*. Dogs and cats play a prominent part in the games of her imagination. She often chases a cat in the room, consciously as a game. She does not hear the English form “bow-wow”. Her mother also uses the half German form /wauwau/, just like Hildegard.

ここでは用語上の注意が必要である。Leopold がここで copula と言っているのは、Brown の用語では進行形の auxiliary *be* である。したがって、この項目が Frequent になったのは 18 Dec 1932 2; 5 である。以前から -ing は使用されてきたが、*be* が省かれるのが普通であった。

698 23 Oct 1932 2; 3

Have and *be* are more frequent as full verbs, not as auxiliaries.

とあったことを思い出そう。Leopold はこの記述に続いて、

Very often : /wat ju dui?/, *What (are) you doing?* ; /wat mti bok dui?/, *What (is) Mr. Brooks doing?* (698)

と、例を挙げている。

13. CONTRACTIBLE COPULA

&

14. CONTRACTIBLE AUXILIARY

これらについて Leopold は特に注意を払わなかったので記述は何もない。しかし Copula が現われたとき、それは Uncontractible copula であったし、Auxiliary が現われたのは Uncontractible auxiliary であったのだから、論理的にもこれらの文法的形態素はその時点よりはあと、すなわち、13. Contractible copula は 2 ; 3才よりあとに Frequent になり、14. Contractible auxiliary は 2 ; 5 才よりあとで Frequent になる必要がある。次の例は、このことに矛盾しない。

Copula

2 ; 4 That's the way I got my apron out. (702)

3 ; 3 Papa, I'm—Mother is ready. (751)

3 ; 7 It's all ours, it's yours and mine and Mama's. (763)

Auxiliary

3 ; 3 I'm just 'tending. (pretending). (746)

————— * —————

各文法的形態素につき 'frequent' 及びそれを類する表現は次のごとくであった。ここにまとめておこう。

1. PRESENT PROGRESSIVE

is frequent, although not prevailing

2.-3. *in*

appears already fairly frequently

on

is used regularly

4. PLURAL

are now used rather regularly

5. PAST IRREGULAR

have become rather frequent

6. POSSESSIVE

?

7. UNCONTRACTIBLE COPULA

are more frequent

8. ARTICLES

(the)

now appears often

- (a)
?
9. PAST REGULAR
steady increase
10. THIRD PERSON REGULAR
is becoming more frequent
11. THIRD PERSON IRREGULAR
?
12. UNCONTRACTIBLE AUXILIARY
is frequent
13. CONTRACTIBLE COPULA
?
14. CONTRACTIBLE AUXILIARY
?

VI.

以上から得られた結果を表にまとめる。

		初出	Frequent	
1.	Present Progressive	22 Aug 1932	1 ; 8	2 ; 1
2.3.	<i>in</i>	22 Aug 1932	a 2 ; 0	2 ; 1
	<i>on</i>	2 Oct 1932	a 2 ; 0	2 ; 2
4.	Plural	18 Sep 1932	1 ; 10	2 ; 2
5.	Past irregular	13 Nov 1932	1 ; 11	2 ; 4
6.	Possessive		1 ; 10	?
7.	Uncontractible copula	23 Oct 1932	b 2 ; 0	2 ; 3
8.	Article (the)	13 Nov 1932	a 2 ; 0	2 ; 4
9.	Past regular	18 Dec 1932	a 2 ; 0	2 ; 4 ? -2 ; 5
10.	Third person regular	4 Dec 1932	a 2 ; 0	2 ; 5
11.	Third person irregular		a 2 ; 0	?
12.	Uncontractible aux.	18 Dec 1932	a 2 ; 0	2 ; 5
13.	Contractible copula		a 2 ; 3	?
14.	Contractible auxiliary		a 2 ; 5	?

(a=after, b=before)

結果を見ると Frequent という表現を、Leopold による規準とみなす方法は、予想以上に Brown の結果と一致しているように見える。Present progressive, *in*, *on* (この2つの前置詞は Brown にあっては同時に集計されたものである), Plural, Past irregular は, *in*, *on* を除き 2 ; 0 才以前に初出したものだがそのまま Brown の順序で並ぶ。(*in*, *on* の2つの形態素は Adam においては *in* のすぐ後に *on* が, Sarah においては同時に, Eve においては *on*, *in* と引き続き習得されるのであるが, Hildegard も顕著な類似をみせている。) Uncontractible copula (不確かな 'this' 一例のみだが) を除き 2 ; 0 才以降に発生した Uncontractible copula, Article (ただし *the* のみ検討可能であった), Past regular, Third person regular, Uncontractible auxiliary も Bro-

wn の順に従う。(その他の文法的形態素も全体的な判断から、極端に習得時期が異なることは考えられないが、その種の推論は本稿で取った方法を逸脱するので、ここではコメントはさしひかえよう。) したがって、さらに綿密な検討は今後の課題とし、一旦結論を出しておこう。

〔結 論〕

Brown の示す習得順序に十分対応する順序が Leopold の選択的記述である日誌からも見出せた。この結果をごくひかえめに評価しても Brown の説に矛盾する記述は何もなかったと言える。よって Diary for Hildegard (Vol. IV) をも含めて Leopold の記録は Brown 説を支持するものとなりうるだろう。

注

- (1) Roger Brown: *A First Language—The Early Stages*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press, 1973. (以下の注においては同書を F. L. と略記する)
- (2) Werner F. Leopold: *Speech Development of a Bilingual Child—A Linguist's Record*, Vol. IV: *Diary from Age 2*, Evanston Ill., Northwestern University Press, 1949.
- (3) 本稿は広義の「文法」について考究するための基礎作業で英文法や幼児心理の研究に重点をおくものではない。
- (4) 例えば Emilio A. Llorach によると,
 'Nombre de distinctions grammaticales, utilisées auparavant sans attribution intentionnelle, ne sont acquises que durant la troisième année: nombre et genre, emploi des articles, des cas, des prépositions, etc. Leur maniement est loin d'être parfait à cette époque; souvent l'enfant n'achève cet apprentissage qu'à un âge scolaire avancé.' (*Le Langage*, pp. 357, Encyclopédie de la Pléiade, 1968)
 又, Slobin はロシア語について,
 'In most of these cases it is of interest to note once again that full mastery of the morphological system comes relatively late in Russian-speaking children. The distinction between mass and count nouns is not stabilized until age eight;, (*The Genesis of Language*, pp. 140, The M. I. T. Press, 1966)
 と述べている。英語以外のより語形変化に富む言語についての検討は別の機会を待ちたい。
- (5) F. L. pp. 255
- (6) したがって Sarah については 4 回分をもって Adam, Eve に対応する一つの sample とされた。F. L. pp. 257.
- (7) 'the constraints that define obligation are themselves acquired over time.' (F. L. pp. 257).
- (8) F. L. pp. 257
- (9) Brown は Courtney B. Cazden の方法を採用した。(F. L. pp. 258)
- (10) F. L. pp. 273. De Villiers, J. G., & de Villiers, P. A.: A cross-sectional study of the acquisition of grammatical morphemes in child speech, *Journal of Psycholinguistic Research*, 1973, 2, 267—78をさす。未見。
- (11) F. L. pp. 273—281
- (12) Brown の研究全体を David S. Palermo は要領よくまとめている。「言語の心理学」(村山久美子訳) 誠信書房, pp. 222—228. 原書は *Psychology of Language*, Glenview, Illinois, 1978.
- (13) 2; 0 才までを取り扱った第 3 巻に記されているので Brown は感違いしたのであろう。
 Leopold, Vol. III, pp. 98に, (At 2; 1 *got* was a parallel case. In the colloquial language, especially of children, "*got*" has come to be a present tense synonymous with "*have*".) (586)
 とある。又, vol. IV, p. 4 に,
 'I *got* my clothes, but with present meaning.'
 とある。(666 22 Aug 1932 2; 1)
- (14) 該当箇所見つけられず(筆者)。
- (15) 原題は次のとおり:
 Vol. I: *Vocabulary Growth in the First Two Years*

Vol. II : *Sound-Learning in the First Two Years*

Vol. III : *Grammar and General Problems in the First Two Years*

(16) F.L. pp. 279.

(17) F.L. pp. 257.

(18) 例えば *be* については, *am*, *is*, *are*, *be* が異形態である.

付 記.

- (1) F.L. p. 255. Brownによれば, このような義務 (obligation) を生じさせる制約 (constraint) にはおよそ四種がある. 以下の例は Brownによる. 1) Linguistic context: 例えば子供が *That book* を *that* が指示代名詞であることが分るようなイントネーションで発音すれば, 3人称の copula と冠詞が要求される. 念のためここで説明をつけ加えておくと, Brown が言うのは, もちろん *That book* — という文のことではなく, 幼児が初期にしばしば行なう *That (is) (a) book*. 「アレ, 本. 」というタイプの文についてである. 2) Nonlinguistic Context: もし子供が話しながらものをさせば, copula は過去や未来よりもむしろ現在形であろう. それが一冊の本であれば複数よりむしろ単数であろう. 3) Linguistic prior context: 子供が, あるいは他の人物が初めて本に言及すれば不定冠詞 *a* である. *eraser* のように母音で始まる名詞なら *a* である. 4) Linguistic subsequent context: もし母親が子供の発話を確認 (confirm) したり拡張 (expand) したら, 何が義務的であったかの判別は容易である. 例 — *Yes, that's a book*. (言語習得における母親のこの役割は重要とみなされ, しばしば議論の対象になる. ここでは Brown は結局上記のいずれの場合もこの母親と同じような判断を行なっていることを言い添えておこう. これは Leopold の判断とも基本的に異ならない.)
- (2) Leopold の研究成果について例えば Els Oksaar は, 言語発達の音声に関する研究は多いが, その中で「最も完璧」なものであるとして, Leopold 第2巻を挙げ, 高い評価を与えている. E. オクサール, 「言語の習得」, pp. 181. (在間進訳), 大修館書店: 原書 *Spracherwerb im Vorschulalter—Einführung in die Pädolinguistik*, Verlag W. Kohlhammer GmbH, 1977.

(昭和56年9月29日受理)

(昭和57年3月15日発行)